

施設生活の中でその人らしさの活動を

～ 小規模活動を通しての学び～

施設名：介護老人保健施設パークヒル天久

発表者：仲里英樹

山田知子・砂川昌昭

【はじめに】

近年、「入所利用者層の変化（要介護度の重度化、認知症高齢者の増大）」により、ご利用者全体でのレク活動が難しくなりつつあるなかで、今後レク活動をどのように行っていけばよいのか検討した結果、「全体活動」ではなく『小規模的な活動』からはじめてみよう！という取り組みを行いました。

「臥床傾向」、「入眠傾向」の高い3名のご利用者へ、短期間で集中できる活動を実施することで、リハビリなどとは異なる、施設利用中のメリハリにつながるよう試みました。

今回は、半年を通じて実施した内容及び症例を報告いたします

【実施内容】

午後のおやつ後の1時間を利用し、介護スタッフ1名を配置、「パズル」「書道」

「読み聞かせ」「クイズ」「計算」等、集団ではなかなか実施出来ない活動内容選択し実施しました。「昔を思い出して」という事で、学校の名残で時間割表を作成し時間割表に沿っての上記のメニュー

を繰り返し実施しました。開始1ヶ月間は、活動を定着させる意味で、日々違うメニューを実施し“離床の習慣化”から始めました。日頃から臥床傾向の強い利用者の為、拒否傾向が強く、抵抗も見られ、なかなか実施継続まで時間を要しました。極力、体調不良でない限り声かけし、やる気を引きだそうと努力しましたが、興味をも示さない利用者、素直に応じ与えられたテーマに沿って作業する利用者、「寝かせて」と訴える利用者と三者三様の反応がみられました。離床が定着し始めなので、次に内容の充実に力を入れる事に重点をおき、1週間同じ活動内容で「昨日の続き」と活動することで、利用者自身が「達成感」を感じられればと考えたのですが、利用者から飽きた様子が伺え、拒否もみられはじめた為、以前の日々違うメニューの実施に戻しました。

【症例報告】

1. 氏名：O. Nさん

女性 95歳 介護度4

疾患名：アルツハイマー認知症、統合失調症

臥床時間が長く、食事時間の離床も拒否がみられはじめていました。

日中の離床時間を増やし、生活にメリハリをつける事と、褥瘡防止（仙骨部に糜爛アリ）を目標に活動へと参加を促しましたが、全てのメニューに対し集中力がなく、日によってはスタッフがセッティングした備品を投げついたり、声かけ、誘導に対し奇声を上げ強い拒否が目立ち、作業活動等は実施に至りませんでした。

そこで、ご家族から「以前は読書が好きだった」という情報を受け、個別で新聞や女性週刊誌をみてもらう活動へと変更した事で、集中し声を出し読書される姿が見られるようになりました。

それに伴い、離床時間も徐々に長くなり、褥瘡も軽快することができました。

2. 氏名：O. Aさん

女性 73 歳 介護度 4

疾患名：統合失調症、鬱病

臥床時間が長く、不定愁訴がみられ、頻回にナースコールでの訴えがあり、全てに関し無意欲的だったので、「意欲向上」を目標におこないました。

当初は頑なに拒否されていましたが、参加していく中で離床時間も徐々に長くなり、レク活動も（気分的なムラが見られるものの）一通り参加されるようになりました。

計算問題やクイズには、即座に回答し、身を乗り出すなど、強い反応を見

せはじめ、回答も全て正解でした。

他のご利用者の中でも、全て答え、普段は無表情でしたが、笑顔が見られるようになりました。

3. 氏名：T. Eさん

女性 77 歳 介護度 4

疾患名：統合失調症、右大腿部頸部骨折

離床抵抗は少ないが、全般的に無意欲、無関心で座位中も閉眼されている事が多く、発語も少なく、昼夜逆転がありました。

活動の参加状態は良いが、自発的な行動、訴えは少なかった為、常にスタッフが付き添い、一つ一つの動作の声かけ誘導を行うと事で、手を動かし作業なんか一通り最後までやり通すことができました。

ほぼマンツーマンの関わりは必要ではありましたが、以前は声かけしても返答がなかったり、オウム返しだったので、自発的発語も見られるようになり、少しずつではあるが表情に変化も見られるようになりました。

【結果】

今回、同じ時間・場所・内容の活動を継続行い、その人の「出来ること」「好きなこと」の「気づき」から活動内容を変えていったことと小規模的な活動をおこなった事が、臥床傾向の改善や、利用者の表情の変化などへと繋がったと考えます。

しかし、スタッフの中にはうまく誘導

することができずに実施できなかった場面もみられ、声かけの仕方や誘導の仕方などスタッフ間でも統一していくことが今後の課題となります。又、入所者 60 名中 3 名と対象者が少ないため、施設全体でのレク活動の活性化まではいたらなかった点が反省となります。

【おわりに】

今回、施設生活の中でメリハリのある生活へ繋げるステップになればと考えスタートした取り組みではありましたが、改めて利用者一人ひとりの嗜好を観察し、楽しみながら参加できるレク活動、求めているレク活動などの実施継続の重要性を感じました。

今後は対象者を増やしていき、小規模のグループをいくつか作るなどの工夫と継続していくための業務改善をおこない、日常生活動作の援助だけではなく、レク活動の中でも利用者の自立へと繋げていける支援をおこなっていきたいと思います。